

桜田勝徳採集のハコフグの剥製について

About Stuffed of Trunkfish Sakurada Katsunori Collected

増崎 勝敏

MASUZAKI Katsutoshi

要 旨

本稿は九州北西部、福岡市東区志賀島で収集された、ハコフグの剥製にかんするものである。この剥製は、桜田勝徳が採集し、1935（昭和 10）年にアチック・ミュージアムに所蔵された。現在は国立民族学博物館に収蔵されている。筆者は、この剥製の用途について、玄界灘・博多湾の島嶼および九州本土沿岸で聞き取り調査を実施した。

その結果、このハコフグが婚姻習俗に深く結びついている地域が複数みられた。桜田は「ナマンサケ」、つまりこのハコフグと供せられる物が、精進物（穢れのないもの）であるしるしであることを証すものである点に言及しているが、婚姻習俗との関連については触れていない。今後の問題点として、ハコフグの用途について検討する必要がある。

【キーワード】 ハコフグ、ナマンサケ、婚姻儀礼

1. 問題提起

ここに 1 尾のハコフグ (*Ostracion immaculatum*) の剥製がある (写真 1・2)。長さ 17.8 cm、高さ 7.6 cm。腹を割いて内臓などの中身を取り出し、乾燥させたものである。この剥製に付されたデー

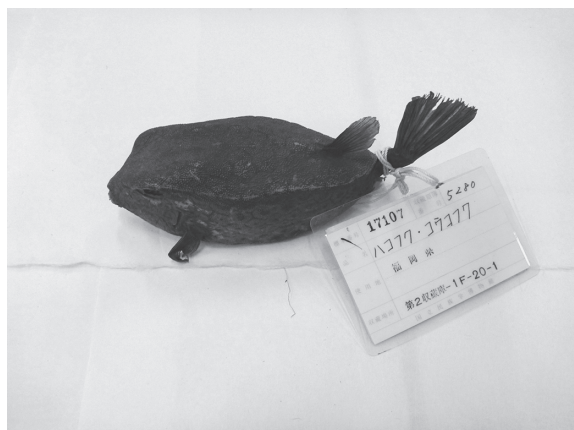


写真 1 ハコフグ剥製 (国立民族学博物館蔵 2017 年 1 月 21 日撮影)

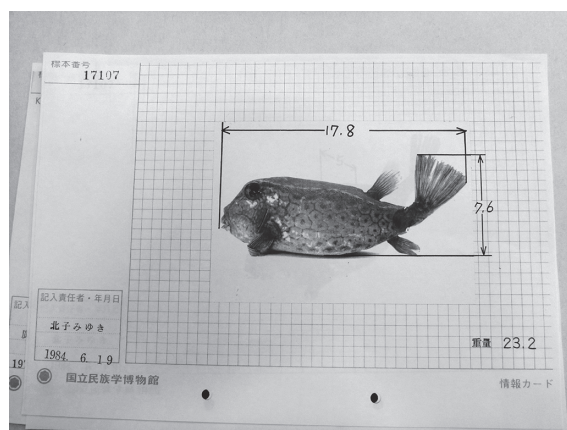


写真 2 ハコフグ剥製 (国立民族学博物館蔵 2017 年 1 月 21 日撮影)

タカードには、桜田勝徳が福岡県志賀島で採集したもので、1935（昭和10）年5月6にアチック・ミュージアムに収蔵されたとある。現在は国立民族学博物館に収められている。さきのデータカードには、その地方名と用途が記されている。「宗像郡海岸―地島・鐘崎―にてはコウコフク、鐘崎にて確かヨメゴフク或はヨメヂフクとも称した。ナマンサケ（精進でないしるし）として用ゐる。熨斗に似てゐる。（桜田氏解説）」とある（写真3）。

桜田は1929（昭和4）年から1931（昭和6）年にかけて、柳田國男のもとで『明治大正史 世相篇』の編集に携わった。同書の刊行後、給料とは別に柳田から300円をもらい、40日がかりの四国の旅に出る。そして、裁判所の判事であった父親の福岡転勤に伴い、柳田の紹介で九州帝国大学国史研究室の無給研究補助員となって、九州各地を民俗調査のために巡った。そのなかで、志賀島も幾度か訪ねている。1933（昭和8）年には早川孝太郎が同大学に留学し、ともに同島に足を運んでいる。そして、この年には早川を通して、来博中の渋沢敬三を宿に訪ねている。桜田は1935（昭和10）年5月1日にアチックへ入所しているから、このハコフグの剝製はその折にアチックへ収蔵されたものと思われる。

桜田の漁業民俗研究についての評価は、宮本常一の著述が端的に示している。少し長くなるが、引用してみよう。

明治以降の人文学者たちで海に関心を持つ者はきわめて少なかった。（中略）概して漁村は他所者の入り込みにくいところと考えられていたからであるが、そうした漁村を訪れて漁村や漁民の生活について調査した最初の人桜田さんであった。[宮本 1980a]

『漁村民俗誌』は桜田さんの学問のスタートをなすものであるが、（中略）このスタートは時期を得たものであり、且つ価値の高いものであった。（中略）漁村をこのように充実した足どりで歩きまわることのできた人は、実は桜田さん以外にはいないのである。[宮本 1980b]

なお、海村生活の調査は、渋沢先生が豆州内浦漁民史料を手がけてから、アチックで大きくとりあげとりあげてくるとともに、（中略）それまで、ひとり桜田氏の丹念な実施調査が、人びとの目をひいていたくらいであった。[宮本常一 1987]

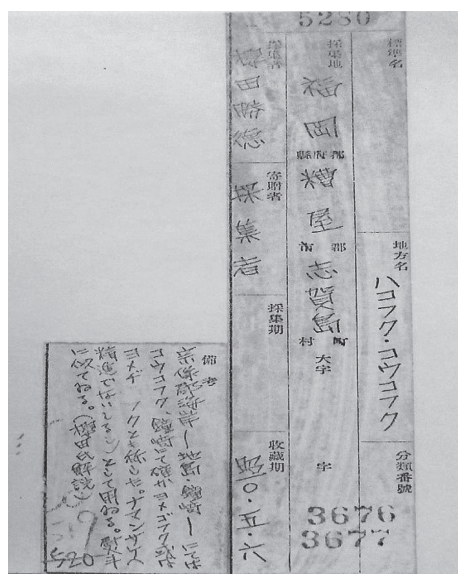


写真3 ハコフグ剝製に添付されたデータ（国立民族学博物館蔵 2017年1月21日撮影）

つまりここから、当時の桜田は、漁村や漁業者の民俗にかんして、パイオニアかつエキスパート的存在であったことがわかる。

さて、ハコフグに話を戻そう。

さきにあげた、ハコフグの剝製に付されたデータについて、再度ここで確認する。記されたデータはつぎのようなものである。

標準名 空欄 地方名 ハコフグ コウコフク
分類番号 空欄 採集地 福岡県糟屋郡志賀島
採集者 桜田勝徳 寄贈者 採集者
採集期 空欄 収蔵期 昭和一〇・五・六

備考 宗像郡海岸―地島・鐘崎―にてはコウコフク、鐘崎にて確かヨメゴフク或はヨメヂフクと称した。ナマンサケ（精進でないしるし）として用ゐる。熨斗に似てゐる。（櫻田氏解説）

桜田はこのハコフグについて次のように述べている。すなわち、地島に滞在した折にお茶の席へ呼ばれて、漬物や小豆の煮物をつまみながらお茶を飲んでいると、漬物を載せた小さな膳の上に、河豚提灯のようなものが置かれており、話を聞くと、これをコーコフグと呼ぶとの内容である。桜田はこの名称について、香物の傍らに置くから、そのように呼ぶのであろうと解説している〔桜田 1932a、桜田 1981a〕。

また、桜田は志賀島に赴いた折、お茶に呼ばれた席で、漬物を載せた膳にアゴ（トビウオ）の鰭が置いてあり、これはナマノクサケに置くのだという聞き取りを得ている。ナマノクサケとは精進にならないように、つまり不浄でないしるしであるということで、コーコフクも同様に用いられるとの話を『志賀記』のなかで触れている〔桜田勝徳 1932b、写真 4・5〕。

以上のように、桜田はハコフグについて、ナマンサケ、つまり不浄でないことの証としてそれを置くのだと解説している。

また、柳田國男も、九州での事例として、ハコフグをカウコフクと称して、香の物をお茶受けにお茶を飲む際には、盆の片隅に河豚の干物の小さいものを置き、これによって精進の食べ物ではないことを示すものであることを述べている〔柳田 1969〕。

そこで筆者は、桜田が聞き取りを行った足跡を追うべく、博多湾、玄界灘の島々と九州本土の沿海部で、ハコフグにかんする聞き取り調査を実施することにした。調査地は、宗像市地島・大島・鐘崎、福岡市東区志賀島・西区能古島、新宮町相島である（地図 1）。このうちより、ハコフグに関する事例を得ることができた地区について、本文では取り上げた。なお、相島の事例については、ハコフグを使用しないが、婚姻にかかわる点で、他の事例と共通する点が多くみられるので、あえて取り上げることとした。また、調査地では複数の話者から話を伺っているが、以下では、代表的な事例を紹介している。

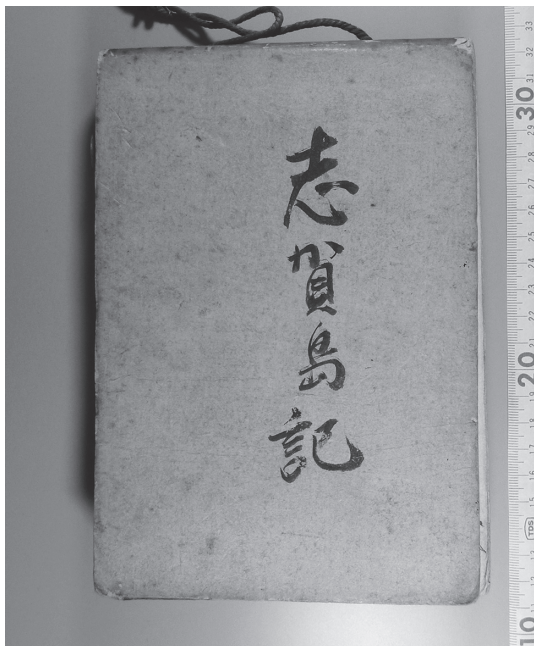


写真 4 『志賀島記』表紙（慶應義塾大学文学部古文書室蔵 2017 年 8 月 2 日 撮影）

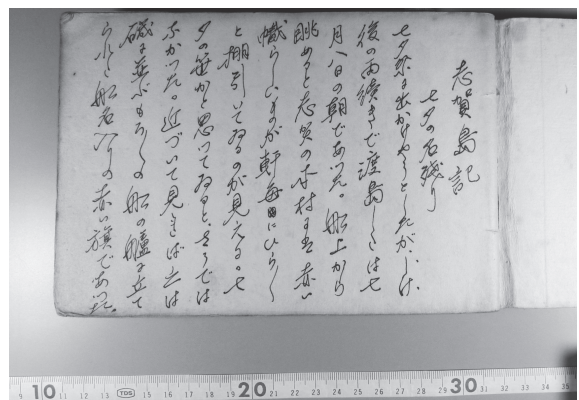


写真 5 『志賀島記』1 頁目（慶應義塾大学文学部古文書室蔵 2017 年 8 月 2 日 撮影）



地図1 玄界灘沿岸部

2. 各地区の概要と聞き取り

1) 地島

地島は玄界灘と響灘の境にある面積 1.7 km^2 キロメートルの島である。島内は泊、豊岡（白浜）の両集落にわかれ、2018（平成30）年1月現在、67世帯151名が暮らしている。主な産業は第1次産業で、漁業のみである（写真6）。

豊岡では1951（昭和26）年生まれの男性の漁業者から話を伺った。この話者によれば、ハコフグはコウコウブクと呼ばれ、干物にして卓袱台の上に置いていたという。縁起物だと思うが、深い意味は分からないということであった。ホコリがついたりして古くなる

と、新しいものにかえたという。

ここからは、桜田が聞いたような内容を得ることができなかったが、膳—卓袱台と飲食に用いる道具の上にハコフグが置かれていたことから、伝承に継続性を見いだすことができる。

2) 志賀島

志賀島は博多湾入口に位置する面積 5.8 km^2 の島である。島といっても、海の中道と呼ばれる砂州によって九州本土とつながった陸繋島である。島内には志賀島、弘、勝馬の3集落がある。島名との混同を避けるため、以降、志賀島集落を志賀と呼ぶことにする。

志賀は2018年2月末現在、世帯数579、人口1130名を擁する。第1次産業のうえからみると、漁業と農業が行われている。両者を比較すると漁業が主となっている。漁業と農業を兼業する世帯はない。漁業では釣漁業、小型機船底びき網漁業が中心に営まれている（写真7）。

弘は2018年2月末現在、世帯数137、人口294を擁する。第1次産業のうえからみると、半農半漁の集落である。世帯には両者を兼業するものがあるほか、漁業では潜水漁を特徴とする。

勝馬は2018年2月末現在、世帯数104、人口231を擁する。第1次産業のうえでは農業のみを営む。自家用に稲作を行うほか、博多あまおう、甘夏柑を主に栽培している（写真8）。

志賀では、おもに1938（昭和13）年生まれの男性漁業者から話を伺った。

この話者によると、志賀ではハコフグのことをコー



写真6 地島豊岡（白浜）漁港（2018年2月10日撮影）



写真7 志賀島漁港博多湾側（2013年4月27日撮影）

ボーブクというとのことである。かつて志賀では村内婚が多かったが、漁家の女性が農家に嫁ぐことは少なく、農家の女性が漁家に嫁ぐほうが多かったとのことである。

シュウギ（結婚式）前後、ナカダチ（仲人）の妻と新婦、婿方のシンセキ（親戚）5～6名で近所両隣や婿方のシンセキに挨拶回りをしたという。これをカオミセと称したそうである。カオミセに回るのは大吉のような暦のうえて縁起の良い日を選び、逆に不浄日、三隣亡を避けたそうである。各家に人がいる夕刻に、提灯をさげて回ったという。

挨拶に来られた家では、玄関の板の間の所に、コーボーブクを三宝に載せて出した。コーボーブクは昔から縁起の良いものとして、カオミセの時にだけ用いられたという。三宝にはタイの尾鰭やアゴ（トビウオ）の胸鰭を干したものを載せることもあったとのことである。カオミセの際、嫁方では回った各家に袋に入れた茶葉を渡したという。コーボブクはタテアミ漁でたまたま漁獲したものを自家で加工した。

弘では、1950（昭和25）年、51年生まれの男性から、主に話を伺った。

ここではハコフグをゴーボーブクと称するとのことである。婚姻に際して、婿方から嫁方に結納金を渡す際、お盆に結納金とゴーボーブクを載せて、その上にイセエビ柄の染めぬきをした布をかけて持参したという。ゴーボーブクは持ち帰ったという。なお、ゴーボーブクはそれ以外のことで用いなかったそうである。ゴーボーブクはタテアミ漁や底びき網漁でたまたま漁獲したものを利用した。

勝馬では、1938年生まれの農家の女性から話を伺った。

ここではこの魚のことをハコブクと称したという。シュウギ（婚礼）のすぐあと、大安のような日のよいときに、オヨメサン（嫁）がナカダチ（仲人の妻）、ムコサン（婿）のシンセキ（親戚）とともに、婿方のシンセキに挨拶に回ったという。挨拶に来られた家では、四角い盆にハコブクのようなナマノクサケを載せて出したとのことである。ヨメサンはそれを額に戴いたという。

この志賀島での聞き取りでは、内容的に違いがあるものの、ハコフグは婚姻にかかわる習俗で用いられていたことがわかる。

3) 能古島

能古島は博多湾に浮かぶ島である。面積 3.96 km²、2017 年 4 月末現在、世帯数 348、人口 691 を数える。第 1 次産業のうえでは、漁業ならびに農業が営まれている。漁業種類は刺網漁業、タコつば漁、農業では柑橘類栽培が行われている（写真 9）。

ここでは、1936（昭和 11）年生まれの男性の漁業者から話を伺った。

同地ではハコフグの名称が用いられているという。縁起が良いものとして、神棚に祀る者があったとのことである。



写真 8 勝馬集落（2013 年 8 月 9 日撮影）



写真 9 能古島漁港（2018 年 3 月 25 日撮影）

聞き取りでは詳細な資料を得ることができなかったが、野間吉夫の著作では婚姻にかかわる儀礼として、つぎのような記述を見いだすことができる。

○嫁に行くときヨメゴザルキといって、カカサンがヨメゴを連れて親戚や近所回りをする。この礼をうけた家ではオナマノクサケといって、鯨のヒレや干ふぐ、干えびなどを三宝にのせて出す。嫁さんはそれをいただいて、お茶餅をおいていった。(註：下線筆者) [野間吉夫 1973]

野間によるこの調査をみるかぎり、婚姻に際して、志賀、勝馬同様の儀礼が行われていたことがわかる。

4) 相島

相島は玄界灘に浮かぶ島である。面積 1.25 km²、平成 30 年 2 月末現在、世帯数 147、人口 267 である。第 1 次産業では漁業が中心で、釣漁業、かご漁業、刺網漁業、キスごち網漁業などが営まれている (写真 10)。

ここでは 1937 (昭和 12) 年、1941 (昭和 16) 年、1942 (昭和 17) 年生まれの話者から話を伺った。相島では、シュウゲン (結婚式) のあと、大安のような暦の良い日の午前、オヨメサン (嫁) とオシュウトメサン (姑) が嫁方、婿方のシンセキ (親戚) を挨拶回りするという。これをカオミセと称するそうである。挨拶に来られた家では、マキイオという、タイとイワシを縛った塩物を三宝に載せて出すとのことである (写真 12)。回る側はのし袋にお茶の葉を入れて渡すという。その日の午後、嫁の嫁ぎ先の家で、刺身やアジゴハンなどのご馳走を作り、シンセキを招いて飲食するという。



写真 10 相ノ島漁港 (2018 年 2 月 11 日撮影)

この聞き取りのなかにあるマキイオについては、桜田勝徳も図入りで「大福帳」に記述している。少し長くなるが引用してみよう。

神棚には巻魚が供えてある。巻魚は図の如く鯛と真鯛を藁でくくりつけたものであるが、後に聞いてみると、此鯛の方だけを巻魚といい、鯛は焼魚と称する由 (魚を焼くのは一種の保存法か浜焼き)。

此神棚に飾ってある巻魚は、此島の漁師の最も大切な祭である旧十月十五日の龍宮祭に^{ひら}平に盛って出されたもので、之を漁に出る時いただいてゆくと (いただくとは食う事ではない。両手で之を持って拝む事だ) 運が強いと云う。此魚は翌年十月新しいのをうけるまで神棚におき、新しいのをうけると古いものを海へ納める習だ。此魚の奇蹟はいろいろとあったらしい。[桜田勝徳 1981b]



写真 11 マキイオ (2018 年 4 月 29 日撮影)

筆者の聞き取りでは、マキイオはハコフグ同様、新婦の挨拶回りの時に用いられるという伝承が得られたが、先に挙げた桜田の記述ではそのことに触れられて

いない。

3. 考察

こうしてみると、ハコフグの使用は、結納や新婦の親戚への挨拶回りといった婚姻儀礼と密接に関連していることが明らかとなった。いっぽう桜田は、自身の著作において、そのことには触れていない。この差異についてどう考えるべきだろうか。

ひとつめには桜田の調査では、婚姻にかかわる習俗で、ハコフグを使用することが、視野に置かれていなかった可能性がある。桜田はもっぱら、ハコフグをナマンサケとしてのみ把握していなかったのではないか。

ふたつめには、伝承の変化が考えられる。桜田が博多湾岸、玄界灘の島々で聞き書きした当時は、ハコフグと婚姻習俗の結びつきがなかった、もしくは薄かったのかも知れない。しかし、この側面から考えると、いくつかの島で似通った伝承が得られたということ、桜田が調査を行った時期と、筆者が聞き取りした伝承の時期が比較的近接していることから、現実的な解釈とはいえない。

今後の課題として、桜田の著作等を精査し、桜田がハコフグと婚姻儀礼との関係をどのように把握していたか、検証する必要がある。

引用・参考文献

- 桜田勝徳 1932a 「香物河豚」『俚俗と民譚』第1巻第8号、単美社、pp. 6-7
 桜田勝徳 1932b 『志賀島記』・慶應義塾大学文学部古文書室蔵
 桜田勝徳 1981a 「未刊採訪記〈大福帳二〉筑前巡島記一相島、大島、地島の巻一」『桜田勝徳著作集』第6巻 未刊
 採訪記 [I]、名著出版、p. 301
 桜田勝徳 1981b 「未刊採訪記〈大福帳二〉筑前巡島記一相島、大島、地島の巻一」『桜田勝徳著作集』第6巻 未刊
 採訪記 [I]、名著出版、p. 252
 野間吉夫 1973 『玄海の島々』、慶友社、p. 89
 宮本常一 1980a 「解説」『桜田勝徳著作集』第1巻、名著出版、p. 401
 宮本常一 1980b 「解説」『桜田勝徳著作集』第1巻、名著出版、p. 408
 宮本常一 1987 「民俗学への道」『宮本常一集』第1巻、未来社、p. 176
 柳田國男 1969 「民俗覺書」『定本 柳田國男集』第14巻、筑摩書房、pp. 456-457